【 疎開 その３ 】

上原　修（化工会）

○　はじめに

小柴さんの『疎開』の投稿に、椎名さんが続いた。

考えてみると、われわれにとって身近な、ある意味当然・必然のようなこの「疎開」だが、戦争末期の 1～2 年間に東京のほか 12 都市の小学校高学年（3～6 年生）だった者だけが体験したわけで、その数約 40 万人が該当する。現在生きている数といえば、より少数になるだろう。33 化工も年代としてはずばりこの世代だが、この中で都市在住となると何人になるか。中には、中学受験のために一時帰京して、3 月 10 日の空襲で命を落とした者もいるとか。斯く言う自分も、数少ない該当者だからこの話題には強く反応し、自分なりの体験を書いて見たくなった。

例によって、思い出したり、調べたりすると、沢山のことが浮かんできて、何をどう書いたらいいかに迷ってしまう・・・・。

○　縁故疎開・・・

戦局が怪しくなってきた昭和 19 年 3 月、泰明国民学校 5 年生だった私は父の実家のある長野県下伊那郡伍和村に縁故疎開して、4 月から村立国民学校 6 年生となった。つまり、東京のど真ん中から信州信濃の山奥に疎開した訳である。環境の落差は昨今の比ではない。登校して下駄箱で脱いだ革靴を、みんなが物珍しそうに覗きにくる。

そんな時代だった。その頃の農村自体、決して豊かではなかったが、疎開者は食糧を自給する術がなく、より惨めであった。ここで体験した農業や養蚕、さらには子供の遊びの 1 年間は小柴さんの書くところと、ほとんど重なるので、ここでは省かせていただく。

翌年、村からただ一人、4 里離れた県立飯田中学校に合格したけど、これだけの距離を通う手段がない。この地方では昔から、このような事情の生徒のために「自炊団」と称して寮でも寄宿舎でもない、従って舎監の先生や賄いのおばさんも居ない、生徒だけの、恰好よく言えば「自治組織」が幾つかあり、雨露しのぐ程度の上屋も持っていた。

そのうちの一つに潜り込んで中学（市内では最高学府）生活が始まった。間もなく敗戦。

食料をはじめあらゆる物資のない時代、10 人足らずの生徒だけの自治（？）生活。

この辺の話もきりがない。今思い返すと、惨めだけど明るい日々だった。

きりの無い話をどう続けるか迷っているうちに、ある展開があったので、話をそちらに切り替えることにする。

○ 疎開の縁・・・

敗戦からの立ち直りは、親の世代にとって、より大変なことだったと思う。

飯田中学が学制変更で併設中学になり、自動的に新制高校に変わり、1 年経ってやっと東京に戻ることができた。まる 5 年間、疎開生活を送ったことになる。

その新制高校 2 年に編入するのに、手懸りもなければ様子も分からない。東京に居た叔父の勧めで、某私立（大学付属）高校に入った。どうも授業が物足りない。夏休みに入って、水道橋の研数学館の補習講座を受けに行った。正面の階段を昇っていると、「おう、上原！」と声をかける奴がいる。K君だ。そこで立ち話。「どうしてる？」に対して、現状の不満を訴えた。「俺が行ってる新宿高校で補欠を募集しているから、受けてみないか」と言う。その足で？早速新宿へ赴いて受験手続。そして受験、幸いにも合格した。

2 学期から、また転校して通い始めたが、当のK君の姿が見えない。そうこうしている内にそのことも忘れ、大学（文系）受験。みごと失敗して浪人・病気・再受験（理系）となるのだがその辺は割愛して・・・。

ただ一つだけ。今から 15 年ほど前、新聞の訃報欄にK君と同姓同名、しかも同年齢。某国立大学の元教授の訃報を見つけ、気になって切り抜いておいたが・・・。

○ 疎開の縁　その 2・・・

時はぐっと下って現在。私は 2 年半前に老人ホームに入居した。

ホーム内に、いろいろな活動があり、ひょんなことから器楽サークルに入ってハモニカを吹くようになった。ホーム内での発表会では、歌うこともあるが、ハモニカを吹いていたのでは歌えない。そこで、ウクレレ教室に通い始めた。

ホームの 2 階が介護フロアになっていて、うちのかみさんはボランティアでお手伝いしている。そのかみさんが、「月 1 回、ウクレレを持って歌う会をやってくれるご夫婦がいる。ちょっと覗いてみないか」と言う。行ってみると、そこに居るのは同じウクレレ教室のHさんではないか。聞けば数年前から慰問に来てくれているという。奇遇である。早速私もハモニカで参加させてもらった。1 回に 20 曲くらいの唱歌を歌う。曲の合間にHさんの軽妙な語りが入るのだが、ある日疎開の話がでた。

渋谷区の笹塚国民学校の 5 年生だったHさんは、昭和 19 年 9 月から翌年 10 月まで、級友らと富山県のお寺に集団疎開をした。当時のHさんの日記を中心にまとめた本を頂いた。その内容を紹介するのは本旨ではないので省略するが、著者略歴をみてハッと閃くものがあった。昭和 8 年生まれ、新宿高校卒。ひょっとしてK君のことが分かるのではないか。駄目元で訊いてみたら、「知ってる。サッカーの上手な人だった。たしか大分前に亡くなったと思う。」という返事。ほぼ間違いない。さらに同期会などで情報が得られれば、教えてくれるとのこと。

ここまでが、去年の暮の話である。

○　おわりに

人生 80 年の中に、いろいろな曲がり角があり、その都度多くの人達との出合いがあった。

特に若いときには、その影響が大きい。ここに紹介した例は、その中でも瞬間的で、且つその後の進路に大きく作用したもので、忘れられないものである。当時は疎開・学制のほかに、病気や家庭の事情などで遅れる者も多かった。K君の場合もそんな状況も推測できたので、Hさんに訊ねてみた次第である。

なお、もう一つ付記しておきたいのは、私の場合、このように善い作用を齎してくれた人々の多くは、比較的早く鬼籍に入ってしまって、天国で待っていてくれているということだ。

（2014/10/24～2015/1/9）